
異世界で下克上

黒龍陣

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

異世界で下克上

【Nコード】

N0248Z

【作者名】

黒龍陣

【あらすじ】

この物語は、主人公が、チート能力を持って異世界へ行くというありふれたはなしです。

処女作で、駄作です。

こうゆうのが苦手な方は、お引き取りください。

第一話 空、飛んでる・・・a r u（前書き）

どうもだめ作者こと、黒龍陣です。

駄作ですけど楽しんでもらえたら嬉しいです。
ではどうぞ。

第一話 空、飛んでる・・・a r u

どうも、自分佳山 健悟（かやま けんご）って言います。

いきなりですが、今空にいて落ちてます。冗談抜きでさっきまで自分の部屋で寝ていて、夢をみていた空を、飛んでいる夢を、んで気を抜いたら落ちた。そして今にいたる。

「・・・もう恐怖も感じねえ・・・」

さっきまで喚き騒いでいたが、疲れて重力に任せている。さてなんでこうなったんだ？

こうゆうのは、よくある神によって異世界にG o ! な、かんじなはず。

だが神にあっていない、能力ももらっていない。

・・・いきなり死亡フラグ？

はっ！？（ ; ）

いやいや死にたくないし！、まだ能力がないと決まってないし！！

「ふむ、能力といえば・・・魔法、か」

そうして俺は駄目もとで呪文を唱え始めた。

「・・・フライ」

呪文を唱えると、重力に逆らいながら徐々に落下速度が落ちていく。

(き、キタ) (。)(。(。(。(。(。(。(。!(!!!)

俺は助かったことと、魔法が使えたことに喜びながら大地に降り立った。

「こんなに、大地が恋しかったのは初めてだ」

周りを見回すと草原だけ続いていた。

「まわりは、何もなしが、明らかに日本ではない、とりあえず荷物確認」

荷物は、水×2、カロリーメイト×2、携帯、ライター、マッチなどがリュックに入っていた。

服装はTシャツにジーパン

「?なんだこれ、俺のじゃないなあ」

リュックのほかに少し大きめのポーチが腰に付いていた。

「あ、手紙が挟んである」

手紙を開け内容を読んでみる事にした。

「はじめまして神です。」

いきなりだけど、
そこの世界に君を飛ばしておいたから好き勝
手に生きていいから。

あとポーチの中の空間をいじって置いたからいくらでも物は入

るから、中にはこの世界のお金や道具　とか入ってあるから
ついでに、チート能力も付けてある。
んじゃ、検討を祈るから。』

なんと適当な神だ！まあチートあるからいいや。
そうだほかに魔法使えないのかな？

ポーチの中身はあとでいいか。

俺は火の玉をイメージして呪文を唱えた。

「ファイヤー・ボール！」

さつきは急いでいたためわからなかったが体の中が熱くなり、血
の巡りが早くなる。

ここで俺はできると確信して力を、手の平に集中させる。

呪文を唱えたと共に直径30センチ弱の火の玉が出現。

近くにいてもまったく熱くなく、それを遠くにあった岩に投げつ
けてみた。

岩に直撃し一瞬に光が駆け戻って爆発。爆発によってできた熱風
がこちらにも届いた。

煙が晴れると、10メートルのクレーターができていた。

俺はその様子をしばらく見て口笛を吹きながら反対の方向に歩い
ていった。

「・・・これは俺が悪いわけじゃない、忘れよう、うんそうだ忘
れよう」

現実逃避しながら俺は・・・逃げた。by作者（笑）

「俺はけっして逃げたわけじゃない!？」

変な電波を受けながら俺は、人がいる場所に向かった。
二時間くらいしてポーチの存在を思い出した。

「さくでポーチになに入っているか」

ポーチを開いて中を覗くと、未来から来た青狸の四次元ポケット
みたいになっていた。

「ぐちゃぐちゃじゃないか、整理しないといけないなあ」

とりあえずいろいろ取り出してみた。

「えゝ、袋が十つ、腕輪、杖、マント、指なし手袋、鎖などなど」

袋には白金貨が一袋に百枚づつ、合計千枚。
指なし手袋は普通、マントは頑丈。
腕輪は、説明書が貼ってあった。

『 説明書 』

この腕輪は、糸使い、自由自在に糸を操れる
糸は腕輪から無限に出る。

目に見える糸や、見えない糸を出せる。

腕輪から糸に魔力を通せば、岩も切れる。
使用者は切れない。

腕輪に付いている宝石は、取れる、しばらくすれば元にもどる。
宝石の方は、遠距離から操り糸を出せる。

* 注意* 魔力を込めて置かないと使用できない。』

んゝだいたいわかった。でも、あきらかに字がちがうなあ
この神につかえている天使はたいへんだなあ

天使「へつくしゅん！・・・・・・？」

さて次はつと、杖かな、30cmの長さ、先に赤い宝石が付いているけど。

あ、宝石に魔力が感じられる、魔石か？

「これはあとで、次は鎖」

これは、鎖の先にナイフが付いていて指輪も付いているなあ・・・

・ H x ？

「まあマントを着て、腕輪と鎖を付けて、杖を持つと

完璧に魔術師だなあ w w w w」

残りをポーチに仕舞い歩き出した。

さて、これからについて考えよう、まずこの世界は魔法が使える、
現金は硬貨、少なくとも

中世時代ⅡRPG、そして魔法は、威力が強すぎ。

・・・・俺ってこの世界では最強？

だが油断はできない、世界はそんなに生優しくない。

慎重に行動しなければすぐにBADエンドだ。

異世界に来たんだからやりたいことはたくさんある。

案1：世界征服

案2：英雄を目指す

案3：美人奴隷を買ってウハウハな生活をする

案4：静かにひっそりと暮らす

案1はできそうだけど、あとあと面倒なことになりそうだから却下。

案4は論外、あとは案2、3か、案2は成り行きでなるとしておいて。

案3の美人奴隷買ってウハウハな生活に決まりだぜ!!!!!!!!!!王道を目指すぜ！俺！

ああ早くファンタジーな住人に会いたいなあ。

その前に、情報がほしい・・・

第一話 空、飛んでる・・・a r u（後書き）

みなさまどうだったでしょうか？
次回は、できるだけ早く出します。

第二話 さつそくモンスター！（前書き）

どうも黒龍陣です。

今回主人公は壊れますWWW書いているうちにおかしくなっていました。

ではござ。

第二話 さつそくモンスター！

どうも変態なだみだみなオリ転生主こと佳山 健悟です。
いま物陰に隠れております。

なぜかって？それは数十分後に至る。

* 数十分前*

さうてどこいこつかねえ

ん？遠くで黒い煙が上がっている見えるなあ

煙があるってことは、少なくとも生命体がいるってことだな。

さつそく行こう。

様子が見える位に近づき、近くにあつた岩陰に隠れて今に至るわけだ。

様子を見る限りでは、魔物が馬車を襲っているらしい、

乗っているの商人か？何人が護衛をつけているけど、相手の数がねえ・・・

ゴブリン、ゾンビみたいな犬、スライム、この三種類が馬車を襲っている。

あの近くの森からきたんだなあ。

ゴブリンは、ざっと数えて20体くらい、ゾンビみたいな犬、あ面倒くさい、ゾンビ犬は、5体、スライムは10体。

ゴブリンが、人を襲いそのおこぼれがゾンビ犬が貰っている。

スライムは、まわりついて自分の体の中に閉じ込めて消化している。

うわぁ、護衛のおっちゃん、がんばっていたけど後ろ注意しないと、後ろに回ったゴブリンがメイスでおっちゃんの頭を、

トマトみたいにしたわww

そうそう、この世界の言葉が通じるかわかんないけど、理解できるみたい。

こつちまで言葉自体通じるかわかんないけど聞こえてくる。

「た、助けてくれーーーー！！！！」

「この、化け物がーーーー！！！！」

「おかさーーーーん！！、おとさーーーーん！！いやー
ーーーー！！」

ほらね聞こえるでしょ。

いやー言葉わからなかったらって思ったらひやひやしたわ。

でもこれで大丈夫 あー安心したからお腹すいちゃった。

携帯だともうお昼過ぎ、お天等様も真上にいるし、カロメを食べますか。

んゝ弁当とかあったらいいんだけど贅沢は言えない。

まあ腹減っているからいいか。

それじゃいただきます。

ん？助けに行かないのかって？冗談言ってるの？馬鹿なの？死ぬの？wwww

たくましい護衛のおじさまがフルボッコ、一様剣術を習ったことはあるけど、

一対三十五、その他もいれてもあきらかに勝負は決まっているし負け戦なんてやらんし、ここは静かにしているのが吉だ。

ん？森からなんか出てきたってデカ！？

それはゴブリンだがあきらかに違うデカさ、雰囲気も違う、ボスっぽいからゴブリンキングという名前にしてやろう。

ん？リーダーっぽい人がキングゴブリンに立ち向かった

でもだめだったね、振り上げたキングゴブリンの腕で叩き潰されている。

・・・グロイ。よく見えないから上に上った、おおよく見える。まあとりあえずこいつら去ったあとに残った馬車の中を漁るか。

「フワ〜ッ・・・」

欠伸と一緒にグツとその場で背伸びをしてもう一度魔物達を見る。

うにゆ？　なんかゾンビ犬の様子が変だなあ　なんか空中の匂いを嗅いでいるような・・・

あれ
・
・
・
？

(う) ゴシゴシ

$$\begin{array}{c} \circ \\ \bullet \\ \bullet \\ \bullet \end{array}$$

(つ) ゴシゴシゴシ

; | ,
 ° | ·
)
 ∴
 !
 ?

なんか吠えたし！うわっ 一斉にこっち見たし、こっちに走ってき
たし。

なんで?! なんでばれた?!

あれ、俺今、岩の上にいる

・ ・ ・ ・ ・ し ま っ た ― ― ― ― ― ! ! ! ! !

やばいやばい！どうする俺！考えろ！いや考えるな感じる！！つて馬鹿やってないで本気で

考えろ俺！今回で二回目の死亡フラグ、うわー！ついてねー俺。逃げるしかないか、でもこのまま戻ったら過去を忘却した場所に戻るしかない。

……つまり、道は唯一つ。

「よっしゃーーーーー突っ込むぜー！！！」

魔物たちに立ち向かっていった。

「リミット・ブレイカー！！」

呪文を唱えると今の身体能力の限界を超え、音速の速さで走り出した。

「まず手始めにスライムから・・・フリーグス！！」

呪文を唱えるとたちまちスライムたちが凍りついた。
ははははザマア！！！！

「次は犬！てめえだ！！！！」

お前のせいでよけいな戦闘しなければならないか！
無様に散れ！！！！

ゾンビ犬達に向かいながら呪文を唱えた
そして完成と同時に流鏑馬のごとく構え

「エアー・カッター！！」

呪文を唱えると同時に風でできた刃が犬達を切り裂いていく。

ここまでの時間が、10秒。丁度リミット・ブレイカーの効果が切れた頃だった。

たった10秒か、連続で使うと体に負担が掛かる、最低3回までなら大丈夫だろう。この時間で決めれば勝てる。

残ったゴブリン達は、なにが起きたのかわからず、ぼーと立って

いた。

「お前たちは、醜いなあその醜さを俺が変えてやろう」

どっかのナルシストみたいなことを言ったが、気にしてはいない。
今の戦闘が楽しめればいいからなあ！ はははははははははははは
は！！！！！！！！（暴走&壊れていますw） by 作者

俺の声で我に返ったゴブリンたちは、一斉に襲ってきた。

おいおいせつかく人が綺麗にしてやろうとしているのに酷いなあ、
そうゆう奴はお・し・お・き

俺は呪文を唱えた

「フレア。アロー！」

イメージ通りに火矢が出現。

眼を走らせ狙いをさだめる仮想の弦を離れた。

火矢は紅い軌跡を残しながら空を駆け抜けて弓を持っていたゴブリンに命中。

威力が強すぎるのか、腹に大穴が開き、周りのゴブリンたちも巻き込んでいく。

あと17体。

さてどうやってあそぶかなあ　手足を打ち抜いて逃げられないようにしたあと、ゆっくり凍らかすかな？

それとも鎖で縛ってここに火の海でも浸かってもらおうかな？

俺が考えていると、後ろからゴブリンが襲ってきた。

すぐさま呪文を唱えた

「リフレクション、考えている所をじゃますんなよ」

ゴブリンの前に壁があるかのように、遮られ一気に弾き飛ばされ2、3メートルまで飛んでいった。

え？なんで殺さないかって？いきなりおもちゃが壊れたら面白くないじゃん。

「・・・そうだし考えた」

鎖でゴブリンキング以外のゴブリンを縛り一箇所に集める。

抵抗しているが無駄無駄。

呪文を唱えた

「フリーズ・ランス！」

手元に氷の槍が出現、それを手に持つとまた少し長い呪文を唱える

「グラキエス・フラワー！、綺麗に散りな！」

氷の槍の先端に魔方陣が展開され、その槍をゴブリンがいるところに投げ付けた。

槍は白い軌跡を残しながら空中を駆け巡りながらゴブリンたちに命中。

槍は地面に突き刺さった途端に砕け散り、花が咲いた。

氷の花がまわりを巻き込みながら咲いた。

30メートルの氷の空間にゴブリンたちを閉じ込めた。

俺は右手を上げ静かに

「ブレイク・・・」

『パチン！』

指を鳴らしたと同時に氷の花は跡形もなく砕け散った。

あゝ疲れた、魔力を使うと精神的に疲れる。

後ろからゴ布林キングが『ガルルル』と駄犬の如き唸り声が聞こえる

「ん？なんだまだ残っていたのか、あゝめんどくさいなあ・・・」

そう言ってる内にゴ布林キングが、こちらに走ってきた。

「ふゝん、そんなに死にたいの？、ならその勇氣に称えて一撃で殺してあげる」

俺は呪文を唱えた

「アブソリ्यूトゼロ（絶対零度）！」

呪文を唱えると同時にゴ布林キングの動きは止まりまわりの草木が凍っていく。

そして、ゴ布林キングの氷像が完成！

んゝ博物館に飾りたいほど綺麗に仕上がった。

さて、ゴミどもは片付けたし馬車を漁りますか。

数分後

大量 大量 収穫は、銅貨、半銀貨、銀貨、金貨、その他。
結構お金もあったし、装飾品もかなりあった。 ついでに地図もあった。

いやあーさすが商人、これはありがたく貰っておこう。

それに、お金は金貨に銅貨が多く、金貨が十枚程度だった。んー、これによるとこうなるなあ

銅貨 < 半銀貨 < 銀貨 < 金貨 < 白金貨

こんな感じかな？まあどうにかなるさあ

お天道様はまだちょっとしか傾いていないからこのまま行くか。

俺は、馬にまたがり町にむかつて走り出した。一樣馬に乗ったことはあるから。

第二話 さっそくモンスター！（後書き）

次回、町に行きます。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0248z/>

異世界で下克上

2011年12月5日20時09分発行